1. How can I remain calm with his staring at me like that?

《語句》 remain C(形・名・分):(依然として)Cのままである、いる
calm:(心・気分などが)冷静な、落ち着いた、平静な
stare at A:Aをじっと見つめる、凝視する
like that:そんなふうに

【解答＆解説】

LESSON BOOK REVIEW Rule-56 に、how は how 単独の場合「どうして」と訳すといいことがあることが書かれていました。本問も「どうして」と訳せばいいでしょう。
もう一つ、staring という動名詞の直前の his は staring の意味上の主語で、両者は主語と述語の関係になっています。
LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。
つまり his staring at me は「彼が私をじっと見つめている」となります。
そうすると全体は「そんなふうに彼が私をじっと見つめては、どうして平静でいられようか(いられるわけがない)」となります。
with は「～な状態が同時にある[存在している]」ということ。with の『核』のイメージは「～と一緒にいる[ある]」、つまり「同伴[随伴]」なのだ。
そしてこの英文は、修辞疑問です。修辞疑問とは、本問のように形は疑問文なのに内容は疑問文ではないという英文のこと。漢文でいうところの'反語表現'のことです。
修辞疑問については、例文をたくさん見ることで慣れるのが一番です。いくつかあげてみましょう。

(ex) Who knows what will become of the world?
この世界がどうなるかなんて誰が知っていようか(いや誰も知らない)
=No one knows what will become of the world.

What is the use of asking him for help?
彼に助けを求めて何の役に立つだろうか(いや何の役にも立ちはしない)
→彼に助けを求めても無駄だ
=It is no use[good] asking him for help.
これらの英文中の use は「役に立つこと、効用、効果、メリット」という意味。

How can I ever thank you?

どうしたらあなたに感謝の気持ちを表せるだろう(いやできない)

→お礼の申し上げようもありません

=I don’t know how to thank you.

=I cannot thank you enough.

Who will believe the rumor?

誰がそんな噂を信じるだろうか(いや誰も信じない)

Can we ever forget his kindness?

彼の親切を忘れることができようか(いやできない)

Does it matter?

それは重要だろうか(いや重要ではない)

→そんなことかまうもんか

ただし、その英文が普通の疑問文なのか、修辞疑問なのかを文脈・状況・イントネーション等で判断しないといけない場合もありますから、注意は必要です（しかしこれは日本語でも同じですね）。

2. There is no reason at all to assume that, in a big city for example, all the people around you are leading active, rich, fulfilling lives, while you alone are on the outside looking in.

《語句》 lead[live] a ～ life:～な暮らしを送る
fulfilling:達成感を与えてくれるような[感じさせてくれる]
on the outside: (囲まれた物の) 外側に、部外者の位置に
the people around you:(自分の)身の回りの人間

【解答＆解説】

全体は、「that節以下だと思い込む理由など全くないのです」。assume の類推法については LESSON BOOK REVIEW Rule-21 2.(1) を参照してみてください。
that節内は、「たとえば大都会では、自分の周りの人間はみな活動的で裕福で達成感を感じる[充実した]暮らしを送っているおり、その一方で自分は一人その外側でそれを眺めている」となるでしょう。本問のように、文章後半の(多くは ，で区切られた) while は「その一方で」となることが多いのです。それから looking in は文章後半の分詞構文ですね。ここは「～しながら」と訳すといいでしょう。

㊟文章後半の分詞構文の訳出法については LESSON BOOK REVIEW Rule-37 3. を参照せよ。

最後に本問の構造分析図を示しておきましょう。

There is no reason at all to assume
Ⓥ　Ⓢ↑

that, in a big city for example,// all the people around you
(接)　大都会では　例えば　S↑

are leading active, rich, fulfilling lives, .
V　活動的な　裕福な　達成感を与えてくれる　O

while you alone are on the outside looking in
(接)　S　～だけ　V　↑外側　(それを) 見つめながら

(assume0)<O>

【全訳】
「たとえば大都会では、自分の周りの人間はみな活動的で裕福で達成感を感じる[充実した]暮らしを送っていて、その一方で自分は一人その外側でそれを眺めているだなどと思い込む理由など全くないのです」

3. ① There is also a lack of balance in people. ② Many more Japanese visit the U.S. than Americans visit Japan. ③ Not only are there vastly more tourists from Japan going to the U.S. than there are Americans traveling in the other direction, but also the numbers of students and researchers are extremely unbalanced.

（東京理科大学）

《語句》lack:欠如
vastly:非常に、ものすごく、莫大に
extremely:極めて、非常に
unbalanced:平衡のとれない、釣り合わない

【解答＆解説】

①
ここは語句さえわかれば問題なかったでしょう。「また、人間におけるバランスを欠いている」となります。

②
ここも Many more Japanese の訳出以外は問題なかったはず。
この many は「多くの」などと訳してはいけません。more+複数(扱いの)名詞 の前に置かれる many は、比較級を強調する副詞で、「はるかに」「ずっと」と訳すのです。
　ちなみに more は「多い、数多くの」という(形容詞の) many の比較級。
ですからここは「アメリカ人が日本を訪れるより、はるかに多い日本人がアメリカを訪れている」となります。

③
LESSON BOOK REVIEW Rule-38 に

> また解釈などでは、「not only A but also B: Aだけではなくて Bもまた」の構文で、not only が文頭に出て、Aに当たる部分が「疑問文の語順」になるというパターンがよく出題される。

とあります。本問がまさにそれでした。確かに Not only の後ろに疑問文の語順が見て取れますね。in the other direction の直訳は「もう一方の方向に」ですが、ここは「(逆に)アメリカから日本に」と訳す方がいいですね。
　the other(+名詞) は「２つあるうちの一方」を表す。

そうすると全体は「アメリカから日本に旅行するアメリカ人より、日本からアメリカに行く旅行者の方がはるかに多いだけでなく、学生や研究者の数も極めて不均衡である［アンバランスである］」となります。

【全訳】
「また、人間におけるバランスを欠いている。アメリカ人が日本を訪れるより、はるかに多い日本人がアメリカを訪れている。アメリカから日本に旅行するアメリカ人より、日本からアメリカに行く旅行者の方がはるかに多いだけでなく、学生や研究者の数も極めて不均衡である」

4. ① Busy or tired as the parents may be, they should try to answer their child's question why he should do the things they demand of him. ② Apart from the value to the child, this is a salutary discipline for the parents themselves; ③ for, called upon to give reasons, they must themselves have good reasons before telling him to do this or that, ④ otherwise the child loses confidence in them.

《語句》 demand A(物事) of B(人):AをBに要求する
try to do[原形]〜:〜しようと(努力)する
apart from A:①Aは別にしても　②Aに加えて(更に)
value:価値、意義、有益(であること)
salutary(形):有益な
discipline:訓練、しつけ、規律
lose confidence in A:Aに対する信頼を失う、なくす
call upon to do[原形]〜:〜してくれと頼む、求める
good reason:十分な理由（根拠）
reason:①理由　②理性　③物の道理、分別
otherwise(副):もしそうでなければ

【解答＆解説】

①
Busy 〜 may be までは「□ as S+V,」の形をしており、これは「Sは□だけれど」と訳す構文です。

LESSON BOOK REVIEW 85ページ (注3) を参照せよ。

それから question と直後の why節は同格関係になっており「どうして〜なのかという疑問」と訳さなければなりません。

LESSON BOOK REVIEW Rule-61 2. とを参照せよ。

the things they demand of him の部分は「名詞 S+V」の形で they 〜 him を the things にかけて「親が子供に対して要求すること」と訳します。

LESSON BOOK REVIEW Rule-52 を参照せよ。

そうすると全体は「親というものは、たとえ忙しかったり疲れていたとしても、親が子供に対して要求しているものを、なぜ子供はすべきなのかという子供の質問に答えてあげるようにすべきだ」となります。

②
文頭の Apart from ～ は「～に加えて、～だけでなく」。それがわかれば後は問題なかったはず。「それは子供たちにとっても価値があるだけでなく[有益なだけでなく]、親自身にとっても有益な訓練となるのである」となります。
salutary については、冠詞の a と、名詞の discipline の間にあるので、品詞は形容詞とわかります。

LESSON BOOK REVIEW Rule-67 を参照せよ。

更に文脈から good型の形容詞と判断し、「すばらしい」とでも訳すことができれば、減点は最少失点で済ますことができるでしょう。

LESSON BOOK REVIEW Rule-68 を参照せよ。

③
出だしの for は接続詞で「というのは～だからだ」という意味。call～reasons までの挿入句を(　　)でくくると、they must themselves have という S+V が見えてきます。for S+V～ となる場合の for は接続詞になるんでした。
called～reasons までは分詞構文で、ここは「条件」を表していると見ればいいでしょう。

LESSON BOOK REVIEW Rule-37 を参照せよ。

そうすると全体は「というのは、もし理由を答えるよう求められれば、あれこれ子供に命令する前に、親自身が十分な理由を持っていなくてはならないからである」となります。good は「十分な」と訳すことがあります。特に reason の前に置かれた場合は必ずそう訳します。覚えておきましょう。

④
ここは語句さえわかれば問題ないですね。「そうでなければ子供は親に対する信頼をなくしてしまうのである」となります。

【全訳】
「親というものは、たとえ忙しかったり疲れていたとしても、親が子供に対して要求しているものを、なぜ子供はすべきなのかという子供の質問に答えてあげるようにすべきだ。それは子供たちにとっても価値があるだけでなく[有益なだけでなく]、親自身にとっても有　益な訓練となるのである。というのは、もし理由を答えるよう求められれば、あれこれ子供に命令する前に、親自身が十分な理由を持っていなくてはならないからである。そうでなければ子供は親に対する信頼をなくしてしまうのである」

5. Since the beginning of the 20th century, We have witnessed the change of a basically hard-working, physically active, rural-based society into a population of anxious and troubled city and suburban residents who start to sweat and breathe hard at the mere thought of exercise and vigorous physical activity.

《語句》witness:～を目撃する
the change of A into B:AがBに変化すること
rural-based:田舎に基盤を置いた
population:集団
troubled:問題を抱えた
suburban:郊外の
resident:住民
breathe hard:息が荒くなる
at the mere thought of A:Aを考えただけで
vigorous:激しい

【解答＆解説】

全体で一文で書かれている難文です。まずはここは構造分析図を示してみましょう。

Since the beginning of the 20th century,//
～以来

We have witnessed the change of a { basically hard-working（基本的に勤勉な） / physically active（肉体的に活動的な） / rural-based（田舎に基盤を置いた） } society into
Ⓢ　Ⓥ～を目撃してきた　O　A

a population of { anxious and troubled（不安な and 問題を抱えた） } { city and suburban（郊外の） } residents
B 集団　住民

who start to { sweat and breathe hard（汗をかく and 呼吸が荒くなる） }
V～し出す

at the mere thought of { exercise and vigorous～activity（運動 and 激しい身体活動） } .
～のことを考えただけで

細かく解説していきましょう。

まず Since ～ century までは問題ないですね。「20世紀の初め以来」です。直後の We have witnessed 部分がこの英文の主節。the change がOですが the change of A into B で「AがBに変化すること」ですから、全体の骨組みは「20世紀の初め以来、私達はAがBに変化するのを目撃してきた」となります。

そして(the change of A into B の)Aにあたるのが a basically ～ society です。

basically ～ rural-based までは society を修飾している。その理由は LESSON BOOK REVIEW Rule-67 にあるように、「冠詞と名詞の間に置かれた

語句は、形容詞として直後の名詞を修飾する働きしかない」から。

Bにあたるのが a population 。of ～ residents は、この a population を修飾しています(訳は「不安で問題を抱えた都市と郊外の住民の集団」となる)。
その後の関係詞節(who ～ activity)は residents を先行詞としてこれを修飾しています。who節内の at the mere thought of ～ は「～のことを考えただけで」と訳し、sweat and breathe hard を修飾しています(副詞句)。そうすると who節は「運動や激しい身体活動のことを考えただけで汗が出て呼吸が荒くなり始める(ような)」となります。

最後に今出てきた「the+mere+名詞+of+A」を用いた表現について整理しておきましょう。
mere は「ほんの、単なる、たったの」「全くの、ただの…にすぎない」という意味。

(ex) a mere child ほんの子供
a mere five minutes わずか５分
Mr. Kimura is no mere professor, but a very distinguished scholar.
木村氏は決してただの教授ではなく非常にすぐれた学者である
上の例は not only A but also B の応用形と考えたらいい。
Even the merest little thing irritated him.
ほんのささいなことでさえ彼はいらだった
the merest は mere の強調形と考えたらいい。
It's mere nonsense. 全くばかげている

この mere は、「the[a] mere+名詞+前置詞+A」の形で用いられることも多いのです。以下にその例をあげてみましょう。

(ex) The mere sight[thought] of a snake makes her shudder.
彼女はヘビを見る[考える]だけで震えあがる
of は「目的格(関係)」を表すとみていい。
You shouldn't panic at that mere tremor of an earthquake.
ちょっと揺れたぐらいでびくびくするな
of は「主格(関係)」を表すとみていい。
A mere glance at his face told me all.
彼の顔を一目見ただけですべてが分かった
glance の場合、at が用いられる。

【全訳】
「20世紀の初め以来、私達は、基本的に勤勉で、肉体的に活動的な、田舎に基盤を置いた社会が、運動や激しい身体活動のことを考えただけで汗が出て呼吸が荒くなり始めるような不安で問題を抱えた都市と郊外の住民の集団に変化するのを目撃してきた」

6. ① Six months later, suspecting autism, Nancy drove her son to New Jersey Central Hospital, which, she was told, had the most experienced testing staff on the East Coast. ② After the testing, the staff at the hospital was not encouraging.

《語句》 suspect:～を疑う
autism:自閉症
drive A to B: Aを車でBに連れて行く

【解答＆解説】

①
文頭から Hcspital までは語句さえわかれば問題なかったでしょう。suspecting autism は「理由」を表す分詞構文と見て「自閉症を疑って[たので]」と訳せばいいでしょう。「６ヶ月後、自閉症を疑ったので、ナンシーは息子をニュージャージー中央病院に車で連れて行った」となります。直後の ，which は「そしてそこ[その病院](に)は」と、カンマで区切って訳し下げればいいでしょう。
LESSON BOOK REVIEW Rule-62 3.(3) を参照せよ。
she was told は挿入節で、この部分は節内の和訳の最後に回せばいいでしょう。そうすると ，which 以下は「そしてそこには、東海岸では最も経験豊富な検査スタッフがいると彼女は聞いたのだった」となります。

②
この部分は enccuraging 以外は全く問題ないところ。encourage が「勇気[元気]を与える」なので ecccuraging は「勇気[元気]を与えてくれるような、励みになるような」。そうするとここは、直訳すると「(しかし)検査後、病院のスタッフは励みにならなかった」となります。
よく入試問題では、この enccuraging に下線が引かれ「どういうことか。説明せよ」などといった設問が問われたりします。わかりますか？
そうです。要するにここは、病院での検査結果は思わしくなかった。つまり彼女の息子は自閉症だと診断されたということを婉曲的に表現しているのです。このように、読解においては、単なる直訳だけではなく、流れをつかめているかもとても大切なのですね。

【全訳】
「６ヶ月後、自閉症を疑ったので、ナンシーは息子をニュージャージー中央病院に車で連れて行った。（しかし）検査後、病院のスタッフは（彼女を）元気づけてはくれなかった」

7. By and large most Americans have grown so used to the idea of passing the bulk of their lives in a series of climate-controlled environments that the possibility of an alternative no longer occurs to them.

《語句》 by and large:概して、全体的に見て
grow[get / become] used to A/ doing～:Ａ/～することに慣れる
the idea of doing～:～するという考え
the bulk of A:Ａの大部分
a series of A:一連のＡ
climate-controlled:空調の効いた
alternative:①他に代わりうるもの、(～の他に)取りうる道、方法、代案
②二者択一
no longer:もはや～ない
A(物事) occur to B(人) :ＡがＢの頭に浮かぶ

【解答＆解説】

全体構造ですが、By and large は「概して」という意味の副詞句で、文の主要素にはなりません。Ｓ(主語)は most Americans、Ｖ(動詞)は have grown です。 grow used to Aで「Ａに慣れる」という熟語ですね。grow は get で言い換えられます。それから骨組みとしてこの英文は so ～ that構文(「とても～なので…する」)が使われていますね。alternative は「(他に)代わりうるもの」が直訳ですが、ここでは「空調を使わない生活(スタイル)」を暗に指していると考えられます。文末の them は most Americans を指しています。構造分析図を示してみましょう。

By and large//

most Americans have grown so used to ～ environments
Ⓢ Ⓥ

that the possibility of an alternative no longer occurs to them.
S ↑ ↑ V

【全訳】
「概して[全般的に見て]たいていのアメリカ人は、一連の空調の行き届いた環境の中で生活の大半を過ごすという考えにあまりにも慣れてしまったので、それ以外の可能性が、もはや彼らの頭に浮かぶことは(ありえ)ないのである」。

8. ① The actions of men were said to be governed by the faculty of reason, those of animals by the faculty of instinct, ② and this attribution of the actions of animals to instinct seems to have disguised from most of those who used the word the need for further study or explanation of them.

《語句》govern:～を支配する
faculty:能力、力
reason:①理由　②道理　③理性
instinct:本能
attribution:～に帰すること
disguise:～を隠す
those who V～:～する人々

【解答＆解説】

①
まず文頭からreasonまで。ここは語句さえわかれば簡単でした。「人間の行動は理性の力によって支配されていると言われていた」となります。

問題は those ～ instinct です。文中の(代名詞の)those は

(1)the people の代用
(2)the+既出の複数名詞の代用

のどちらかですが(LESSON BOOK REVIEW Rule-55 1.を参照せよ)、ここでは(2)、つまり the actions の代用と見ます。

次に those ～ instinct の部分の省略を見抜けたかどうかです。この部分、どう見ても文法的にも構造的も不完全ですね。そういう時はまず省略を疑ってみるのです。英語では、同じ構造の文が並列される場合、(後半における前半との)同一(の役割の)語句は省略可能なのです。
LESSON BOOK REVIEW Rule-49 を参照せよ。

そこで直前の文を参考に、その省略を補うと以下のようになります。
→ those[=the actions] of animals were said to be governed by the faculty of instinct

これが見抜ければ後は簡単です。「動物の行動は本能の力によって支配されていると言われていた」となります。

②
S(主語)は this attribution、V(動詞)部分は seems to have disguised です。
この disguise には「disguise A from B:BからAを隠す」という語法があります。
実は本問はAにあたる語句が長すぎるために、

disguise from B A

という構造になっているのです。
LESSON BOOK REVIEW Rule-47 を参照せよ。

Aにあたるのが the need で、これを修飾する for 以下を含めるとこんな訳になります。

the need for further study or explanation of them

「それら(them=the actions of animals)を更に研究し説明する必要性」

Bにあたるのが most of those で、これを修飾する who 以下を含めるとこんな訳になります。

most of those [who used the word]

「その言葉(=instinct:本能)を使う人々のほとんど」
この those は the people の代用と見ればいい。

少々複雑なので、分析図にまとめてみましょう。

this attribution of the actions of animals to instinct
Ⓢ

seems to have disguised from **most of those** [who used the word]
Ⓥ B V O

the need for further study or explanation of **them.**
A

さてそれでは全体の訳ですが、この英文の主語は先程も言ったように this attribution。その後の of は目的格の of でした。そこで以下のように「他動詞+目

的語」の形で読み換えてみるとよかったのです。

attribution of the actions of animals to instinct

⇒ attribute the actions of animals to instinct
(他) O

そうするとこの部分は「動物の行動を本能のせいにする」と訳せます。

attribute には「attribute A to B:ＡをＢのせいにする」という語法がある。ただこれを知らなくても LESSON BOOK REVIEW Rule-26 7. から、この意味は読み取れる。

そしてこの英文も無生物主語構文なので、今訳した部分を「原因」として、「その言葉(「本能」)を使う人々のほとんど」を和訳の主語にして訳出するわけです。

無生物主語構文の上手い訳し方については PartⅣ 1.の解説を参照せよ。

②全体はそうするとこんなふうになります。

「そして動物の行動をこのように本能のせいにしたことによって[したおかげで]、本能という言葉を用いた人々のほとんどは、動物の行動を更に研究し、説明する必要性を見失ってしまったかのように見える[気づかなかったかのように見える]」

【全訳】

「人間の行動は理性の力によって支配されていると言われていた。動物の行動は本能の力によって支配されていると言われていた。そして動物の行動をこのように本能のせいにしたことによって[したおかげで]、本能という言葉を用いた人々のほとんどは、動物の行動を更に研究し、説明する必要性を見失ってしまったかのように見える[気づかなかったかのように見える]」

9. The assertion that mathematics has been a major force in the molding of modern culture, as well as a vital element of that culture, appears to many people incredible, or at best, an extreme exaggeration.

（神戸大）

《語句》assertion:主張
major force:原動力
mold:～を形成する
vital:重要な、不可欠な
element:要素
appear C(形容詞・分詞)：Cのように見える
incredible:信じられない
at best:せいぜい
extreme:極度の、極端な、過度の
exaggeration:誇張

【解答＆解説】

本問は全体で１つの英文で構成されています。先頭の The assertion は(前置詞などのついていない裸の)名詞です。これがＳ(主語)と見ていいでしょう。その直後に that節がありますね。文頭の(裸の)名詞の直後に that節が現れたら、その that節の可能性は「同格節」か「関係詞節」のいずれかと思ってまず間違いありません。いずれにしても that節は直前のＳ(主語)を修飾しています。

LESSON BOOK REVIEW Rule-８ を参照せよ。

その(同格節か関係詞節かの)特定は後でするとして、とりあえずこの that節の終わりを見極めます。節の終わりの見極め方は、その節のはじめから数えて２つ目の動詞よりも手前で(その節は)終わっていると判断するんでしたね。

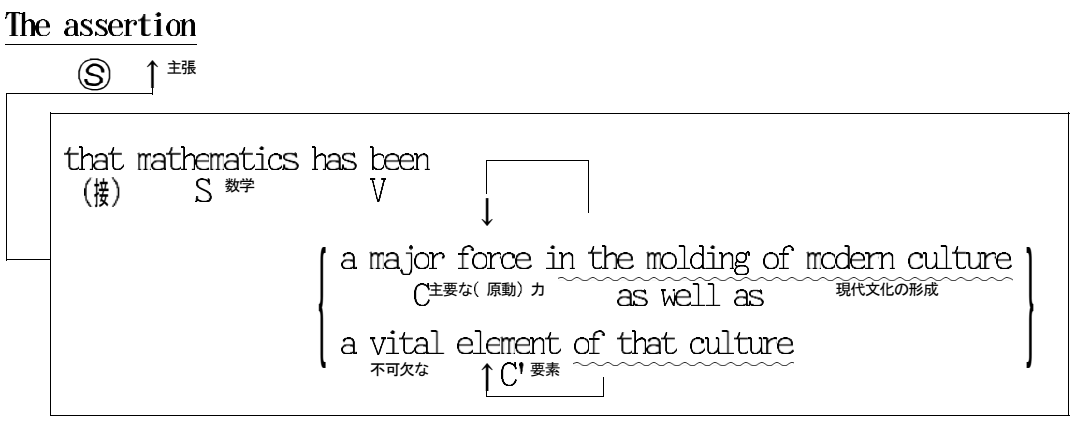
LESSON BOOK REVIEW Rule-４ を参照せよ。

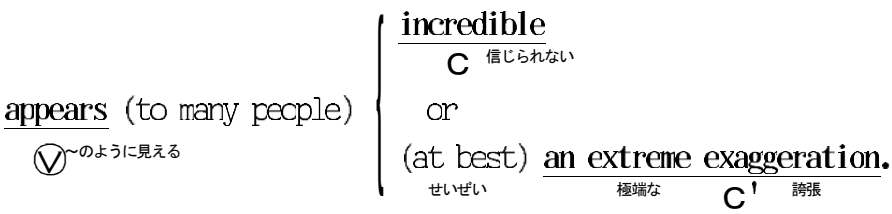
that から数えて２つ目の動詞は appears。この手前で that節は終わっている。そしてこの appears こそがこの英文のＶ(動詞)だったのです。appears 直後の to many people(「多くの人達にとって」)、という「前置詞+名詞」を(　　)でくくると、incredible という形容詞が見えてきます。この incredible と or によって結ばれた an extreme exaggeration が共通して appears のＣ(補語)になっていたのがわか

ったでしょうか。

appear C(形・名・分) で「Cのように見える」という語法がある。at best も「前置詞+名詞」で、これも(　　)でくくってしまうといい。

構造分析図を示してみましょう。





こうしてこの英文は第二文型(ＳＶＣ)だったことが見えてきました。骨組みとしての訳は、「that節以下という主張は、多くの人にとって信じがたいか、せいぜい極端な誇張であるかのように見える」となります。

appear は、ＳＶ、つまり第一文型では「現れる、姿を現す」という意味ですが、本問のように、後ろに「名詞」「形容詞」「不定詞句」などをＣ(補語)としてとる、つまりＳＶＣで使われる場合には「Cのように見える[思われる]」という意味になります。この appear は seem で言い換えられます。

先程判断を後回しにした assertion の直後の that節の役割ですが、実はこれは同格節で、assertion を言い換えています。「that節以下という主張」とまとめればいいでしょう。なぜ同格とわかるのか。それは、まず同格のthat節をとる名詞というのは基本的に２種類しかありません。具体的には以下の２つです。

(1)「思考・感情」「認識」「発言」型の名詞　☞要するに「思う」「知る・わかる」「言う」型の動詞から派生した名詞。

(ex) statement(発言)　argument(主張)　idea(考え)　thought(考え)、recognition(認識)

⑵「事実・証拠・情報」「機会・可能性」などを表す名詞。

(ex) fact(事実)　evidence(証拠)　proof(証拠)　news(知らせ)、chance(機会)

assertion(主張)は、「発言」型の名詞です。その直後のthat節ですから、「that節＝同格節」とみて、ほぼ間違いないとすぐ察することができるのです。ただ、最終確認として、that節内が「完全な文」かどうかは確認してください(もし that節内が「不完全な文」であれば、そのthatは関係代名詞ということになる)。
本問のthatの直後には(この後解説しますが)「完全な文」がきているので、これで「that節＝同格節」と確定できるのです。

そこでthat内の構造ですが、mathematicsがＳ(主語)、has been がＶ(動詞)、a major force と a vital element が as well as によって並列されて、共通してＣ(補語)になっています。つまり that節内も第二文型(ＳＶＣ)だったのです。
A as well as B は、「Ｂだけでなくａもまた」と、後ろから訳すのが特徴です。

(ex) Nancy went to London as well as Paris.
ナンシーはパリばかりでなくロンドンへも行った
Ben as well as his parents is going to Europe.
両親はもちろんベンもヨーロッパへ行くことになっている
As well as being a college student, she is on the editorial staff of a magazine.
彼女は大学生であるほかに、ある雑誌の編集に参加している
最後は　as well as B 部分が文頭に移動した応用例。

それから「that culture ＝ modern culture」です。

そうすると、that節内はこんな訳になります。

「数学(というの)は、現代文化の不可欠な要素であるだけではなく、その(現代文化の)形成における主要な原動力である」。

【全訳】
「数学は、現代文化の不可欠な要素であるだけではなく、その(現代文化の)形成における主要な原動力であるという主張は、多くの人にとって信じられないか、せいぜい極端な誇張であるかのように見える[思われる]」

10. The very essence of teaching is to get people to think for themselves; to think independently; not to accept tabloids; to separate the good from the false; to develop the trained, disciplined mind capable of standing up against the impact of prejudice.

《語句》the very+名詞:まさに～、真の～
essence:本質
for oneself:一人で、自分の力で
independently:独立して、自主的に
tabloid:要約(されたもの)
separate A from B:ＡとＢを見分ける
the good:良いもの→本物⇔the false:偽物
trained:鍛えられた
disciplined:しつけられた
(be) capable of～ing:～することができる
stand up against A:Ａに抵抗する
prejudice:偏見
impact:影響

【解答＆解説】

全体の骨組みは The very essence (of teaching) がＳ(主語)、is をＶ(動詞)、to get～prejudiceまでをＣ(補語)とする第二文型(ＳＶＣ)ととらえればいいでしょう。そうすると「教育の真の本質は、to get以下である」という和訳の骨組みができあがりますね。

次ですが、先に

the trained, disciplined mind capable of standing up against the impact of prejudice

の部分の構造を説明しておきます。the trained, disciplined mind は「鍛え上げられ、しつけられた精神」。直後の capable～prejudice は、mind を修飾する形容詞句です。

the trained, disciplined mind

↑

capable of standing up against the impact of prejudice

先程の訳に capable 以下を加えると、この部分はこんな意味になります。

「偏見の影響に抵抗することができる鍛え上げられ、しつけられた精神」。

問題は to get 以下です。これは

get+C+to do[原形]～「Oに～させる(してもらう)」

という使役の get が使われているのです。実は get の後ろにある全ての to do[原形]～, not to do[原形]～は、全て get+O+to do[原形]～ の、 to do[原形]～ にあたるものだったのです。

get+people+
- to think for themselves
- to think independently
- not to accept tabloids
- to separate the good from the false
- to develop the trained disciplined mind capable～

でもこのような使役の get (の用法・意味)がよくわかっていなかったらどうしたらいいのでしょうか？ そんなときに役立つのが LESSON BOOK REVIEW Rule-23 3.です。

「ＳＶＯＣ」の中でも、特に『S+V+O+to do[原形]～』『S+V+O+ do[原形]～』の形なら、「ＳはOが～する方向に仕向ける」と訳してもいい

このルールを使って、to get 以下をこんなふうに訳してしまえばいいのです。

「人々が自分の力でものを考え、自主的にものを考え、要約されたものを受け入れるのではなく、本物と偽物の区別をし、偏見の影響に抵抗することができる鍛えられ、しつけられた精神を発達させる[育む]方向へと仕向けることである」。

あとはこれに「教育の真の本質とは」という主語を付け加えれば和訳は完成です。

【全訳】
「教育の真の本質とは、人々が自分の力でものを考え、自主的にものを考え、要約されたものを受け入れるのではなく、本物と偽物の区別をし、偏見の影響に抵抗することができる鍛えられ、しつけられた精神を発達させる[育む]方向へと仕向けることである」

強調の形容詞について。

10.の問題で very が 名詞を強調する形容詞として使われていました。

「very は『非常に』という意味の副詞しかない」

と思い込んでいた人は訳せなかったでしょう。
いい機会なので、この very のような、読解で知らないと苦労する、強調の形容詞を３つ紹介しましょう。

(1) single。

single は「a single+単数名詞」で「単一(one)」の意味を強調します。

(ex) I have not a **single** penny with me.
私はびた一文も持ち合わせていない

(2) possible(～できる限りの、この上ない)と imaginable(想像でき得る限りの)。

possible, imaginable は、以下の場合強調語として用いられることがあります。名詞の前、後ろどちらにも置けますが、名詞の後ろに置く方が強調の意味が強まります。

①(possible・imaginable が)最上級や序数と共に使われている

(ex) the best **possible** chance この上もない好機
=the best chance **possible**
the worst **imaginable** record 想像し得る最悪の記録
=the worst record **imaginable**

②(possible・imaginable が) all, every, any, no等と共に使われている

(ex) with all **possible** kindness 精いっぱいの親切で
do everything **possible** できる限りのことをする
every method **imaginable** ありとあらゆる方法

a book of no **imaginable** literary value
文学的価値がまったくない本

possible, imaginable に限らず －able, －ible型の形容詞は、上記のルールがあてはまる場合、単独で名詞を後ろから修飾することがあります。その場合、(最上級の形容詞のついた名詞につけて)の名詞の範囲を限定する働きをします。例をあげておきましょう。

(ex) the latest information **available** 入手しうる最新の情報
I'll leave here by the first flight **available.**
最初に乗れる飛行機で立ちます

上の英文の場合、available は直前の the latest information、the first flight を修飾しています。もちろん the first available flight、the lates available information としても間違いではありません。

⑶形容詞の very。

形容詞の very は(「the very+A(名詞)」「one's very+A(名詞)」)として名詞を強調できます。
形容詞の very の訳し方は、基本的には「まさにその～」でいいのですが、細かなニュアンスの違いもあるので、下の例文でよく確認しておくといいでしょう。

《適応性などを強調して》	「ちょうど」「ぴったり」「まさに」
《同一性を強調して》	「まったく同じ」「ほかならぬ」 「～そのもの」
《驚き・事の重大性を示して》	「まさに」「ただ～(な)だけで」 「～で[に]すら」
《反対を表す語を強調して》	「まったく(反対だ)」

(ex) the **very** thing for the purpose その目的にまさにぴったりの物
before[under] my **very** eyes 私のすぐ目の前で
He was the **very** man for such a position.
彼はそういう地位にまさにうってつけの人物だった
I've just arrived here this **very** minute.
たった今ついたばかりだ
He talked to me in this **very** room.

彼はほかならぬこの部屋で私に話しかけた

The **very** thought of it is distressing.

そのことを考えるだけでも胸が痛む

She came to dread his **very** name.

彼の名前を聞いただけで彼女は恐れるようになった

The lion's roar caused the **very** rocks to tremble.

ライオンの唸り声は岩をも震わせた

最後に強調の副詞について一言だけ。

強調の副詞といえば very が有名ですが、もちろんそれ以外にも

awfully, highly, extremely, terribly, really, simply

などが「非常に、大変に、とても」という意味で使われます。

(ex) It's **awfully** hot today. 今日はとても暑い

He is a **highly** ambitious person. 彼はとても野心的な人物である

The problem was **extremely** hard. その問題はたいへん難しかった

I'm **terribly** worried about you.

あなたのことをすごく心配しています

そのような強調の副詞の中で注意したいのが badly です。なぜなら badly は「必要、病気、被害」等を意味する文脈で用いられると「ひどく、非常に」という意味になることがあるからです。

(ex) She **badly** needed[wanted] the money.

彼女にはどうしてもその金が必要だった

The passenger was **badly** injured. 乗客は重傷を負った

They were **badly** defeated in the finals.

彼らは決勝でこてんぱんに敗れた

もちろん badly には、(そのような文脈以外では)「悪く、まずく」「下手に」「間違って」という意味もあります。

(ex) She speaks **badly** of him. 彼女は彼のことを悪く言う

He plays tennis very **badly**. 彼はテニスがとても下手だ

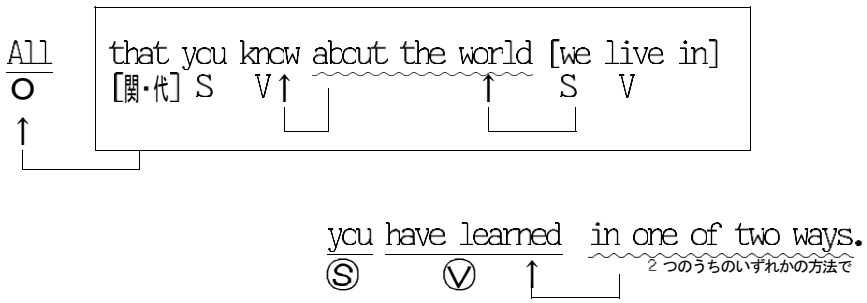
ちなみに badly の比較級、最上級はそれぞれ worse, worst。

11. ①All that you know about the world we live in you have learned in one of two ways. ②Some of the information, of course, you got through firsthand experience. ③But most of the knowledge you have, as a matter of fact, you acquired secondhand - through language.

《語句》 firsthand:直接的な
as a matter of fact:実際
acquire:～を手に入れる

【解答＆解説】

①
この英文はＯＳＶの構造をしていましたがわかりましたか?「Ｏ＝All」「Ｓ＝ycu」「Ｖ＝have learned」です。そして下図のように that～in までは、All を修飾する関係詞節でした。the world と we の間には（関係代名詞の）which が省略されています。



ＳＶＯ構文は、Ｏが文頭に飛び出し、本問のようなＯＳＶという構造になることがあるのですね。
LESSON BOOK REVIEW Rule-41 を参照せよ。

なお、ycu は「一般の人」を指す代名詞です。全体の訳は以下のようになります。

「自分が生活している[生きている]世界に関して、自分が知っている一切のことを、人は２つのうちのいずれかの方法で学んできた」

①のＯＳＶの構造が読み取れなかった人は以下の３つの知識が欠けていたのかもしれません。

⑴名詞(の仲間)は、基本的にＳ・Ｏ・Ｃのいずれかの働きをするもの。文頭の All という代名詞も、名詞の仲間なので Ｓ・Ｏ・Ｃ のどれかの役割をしているのではないかと予想できる。

⑵learn は基本的に他動詞で、後ろに目的語になれる名詞(の仲間)を必要とする。しかし本問の (have) learned は、後ろに目的語になれる名詞を持っていない。そこで、文頭の All が実は語順が変化した (have) learned の元々の目的語なのではないかと考える。

⑶ＳＶＯ構文は、ＯＳＶの語順変化が起こりうる。

②

ここもＯＳＶです。「some ＝Ｏ」「you ＝Ｓ」「got ＝Ｖ」です。
of course は挿入された副詞句(文全体を修飾していると見ればいい)。

Some of the information, of course, you got through firsthand experience.
O　　Ⓢ　Ⓥ

この部分の訳は「なるほど、その知識[情報]の中には、直接的な経験から[を通して]手に入れたものもある」となります。

③

実はこの英文もＯＳＶなのです。「most ＝Ｏ」「(２つ目の)you ＝Ｓ」「acquired ＝Ｖ」です。knowledge と (１つ目の)you の間には(関係代名詞の) which が省略されています。as a matter of fact は挿入された副詞句(文全体を修飾していると見ればいい)で主要素を決定する際には一旦(　　)でくくってもよかったでしょう。

But most of the knowledge [you have], (as a matter of fact),
O　　S　V

you acquired secondhand - through language.
Ⓢ　Ⓥ

この部分の訳は「しかし、自分が持っている知識の大半は、実際のところ間接的に、つまり言語を通して獲得したものである」となります。

⚠through の直前のダッシュ(－)は「即ち」「つまり」と訳せばいい。LESSON BOOK REVIEW　Rule-65 を参照せよ。

【全訳】

「自分が生活している[生きている]世界に関して、自分が知っている一切のことを、人は２つのうちのいずれかの方法で学んできた。なるほど、その知識[情報]の中には、直接的な経験から[を通して]手に入れたものもある。しかし、自分が持っている知識の大半は、実際のところ間接的に、つまり言語を通して獲得したものである」

12. The living Beethoven, whose memory is thus honored, might not have obtained from his native town in the days of suffering and poverty which were so numerous during his troubled life the ten-thousandth part of the sum bestowed upon him after his death.

《語句》 living:生きていた(頃の)
honor:～を尊ぶ
obtain:～を手に入れる、手にする
native town:生まれ故郷の町
suffering:苦悩
poverty:貧困
numerous:数多い
troubled:悩み多き
sum:金額
bestow:～を与える

【解答＆解説】

まずこの英文の骨組み(文構造)ですが、S(主語)は The living Beethoven(生きていたころのベートーベン)、V(動詞)は might not have obtained(手にしていなかったかもしれない)、O(目的語)がthe ten-thousandth part of the sum(万分の一の額)。つまり第三文型(SVO)だったのです。全体の構造分析図は以下の通りです。

The living Beethoven (, [whose memory is thus honored],)
生きていた頃の Ⓢ　S死後の名声　V このように　C尊ばれている

might not have obtained (from his native town)
Ⓥ　手にする　生まれ故郷の町

(in the days of suffering and poverty [which were so numerous
苦悩と貧困の日々には　V　C多かった

during his troubled life])
悩み深き彼の人生

the ten-thousandth part of the sum bestowed upon him after his death.
O万分の一の額　p.p.彼に与えられた　彼の死後に

次に whose memory is thus honored の部分ですが、「死後の名声がこのように尊ばれている」と訳せばいいでしょう。memory には「死後の名声」「遺名」という意味があります。
続いて from his native town ですが、「彼の生まれ故郷の町から(は)」という意味で、might not have obtained を修飾しています(副詞句)。
in the days of suffering and poverty which were so numerous during his troubled life の部分は、「その悩み多き生涯において数多かった苦悩と貧困の日々には」と訳せばいいでしょう。which節の先行詞は suffering and poverty。during his troubled life は so numerous を修飾しています(副詞句)。そして in ～ poverty までは、might not have obtained を修飾しています(副詞句)。

これら

whose memory is thus honored
from his native town
in the days of suffering and poverty which were so numerous during his troubled

という３つの挿入が、全体構造をわかりにくくしていました。
ただこれらは全て「関係詞節」と「前置詞句」ですね。関係詞節や前置詞句は文の骨組みになることは(基本的に)ないので、(　　)でくくると文の骨組みが逆にグッと浮かび上がってくることについてはもう皆さんベテランですから、ここは理解できたと思います。
最後に文末の bestowed upon him after his death ですが、これは目的語の the ten-thousandth part of the sum を修飾する過去分詞句です(形容詞句)。「彼の死

後に(彼に)与えられた」と訳せます。
bestow の意味の類推法は、本問の bestowed が bestow A upon[on] B の受身からきていることが見抜ければ可能でした。実は「動詞+ A on B」は「AをBに与える」が基本。そこから簡単に類推できるのです
LESSON BOOK REVIEW Rule-26 5.を参照せよ。

【全訳】

「死後の名声がこのように尊ばれているベートーベンは、生きていた頃、悩み多き生涯に数多かった苦悩と貧困の日々には、死後に与えられた額の万分の一さえも、故郷の町からもらえて[手にして]いなかったかもしれない」
the ten-thousandth part of sum に even を付け足し、even the ten-thousandth part of sum(万分の一の額さえも) と訳すとよりいい和訳になる。

13. An amazing experiment in a planetarium in Germany proved that garden warblers, set free while an artificial autumn sky was projected on to the dome of the building, instinctively tried to head southwest - the direction they would have taken had they been let loose into the wild at that time of the year.

《語句》amazing experiment:驚くべき実験
planetarium:プラネタリウム
garden warbler:ニワムシクイ ☞ウグイスの仲間。
set O free:Oを放つ[自由にする]
artificial:人工的な
be projected on to the dome:ドームに映し出される
instinctively:本能的に
head:(ある方向に)向かう
be let loose into the wild:野生(の状態)に解き放たれる

【解答＆解説】

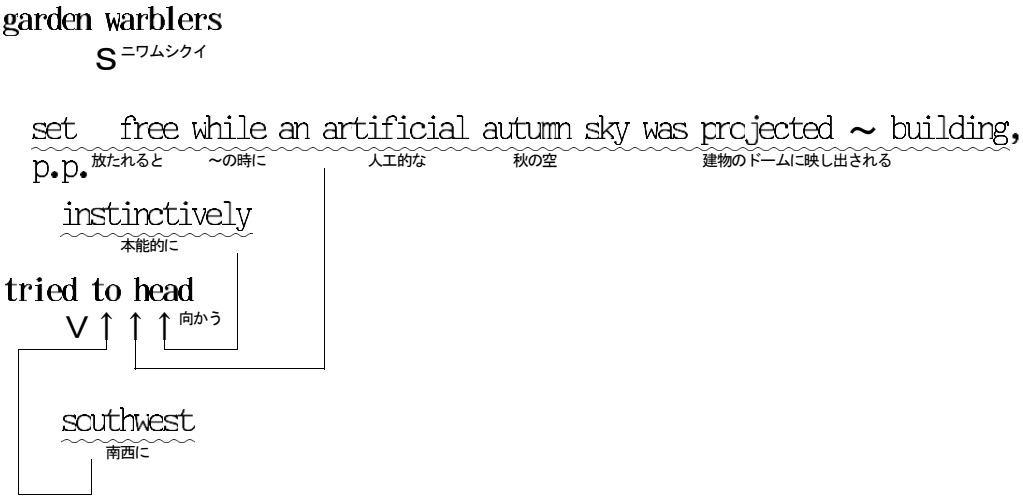
全体で一文で書かれています。文全体のＳ(主語)は An amazing experiment、Ｖ(動詞)は proved 。直後のthat節がＯ(目的語)で、第三文型(ＳＶＯ)になっています。Ｓ(主語)とＶ(動詞)の間の in a ～Germany はＳ(主語)である An amazing experiment を修飾し(形容詞句)、骨組みの訳は「ドイツのあるプラネタリウムにおける驚くべき実験が that節以下のことを証明した」となります。

An amazing experiment in a planetarium in Germany proved that S+V～.
Ⓢ　↑　Ⓥ　O

proved は「～を証明した」ですが、PartⅣ 1.の解説の通り、「～を示した」と訳しても問題ありません。
次にthat節内の構造ですが、文の骨組みにならないものを(　　)でくくって、骨組みを浮かび上がらせてみましょう。

garden warblers (, set free while an artificial autumn sky was projected on to the dcme of the building,) (instinctively) **tried to head** (scuthwest) (- the directicn they wculd have taken had they been let lcose into the wild at that time of the year).

そうするとＳ(主語)として garden warblers、Ｖ(動詞)として try (to head)が見えてきます。それ以外は全て文の骨組みからはずれており、この部分(that節内)は第一文型(ＳＶ)でできていたことがわかります。ちなみに instinctively と scuthwest はそれぞれ「本能的に」、「南西に」という副詞で、文の主要素にはならず head を修飾しています。



ＳとＶの間で、カンマとカンマではさまれた以下の部分(set ～ building)は、挿入された(過去分詞で始まる)分詞構文です。

> set free while an artificial autumn sky was projected cn to the dcme of the building
>
> 人工的な秋の空がその建物のドームに映し出されている時に放たれると

と、「時」又は「条件」で訳せば良いでしょう。

分詞構文の上手い訳し方については LESSON BOOK REVIEW Rule-37 2. を参照せよ。

set が動詞の過去形ではない理由は、文頭の garden から scuthwest までの間には「(従位)接続詞」「関係詞」「疑問詞」にあたる語がありません。ということはここまでで動詞は１つしかあってはいけないわけで、それ(動詞)にあたるのは tried (to head)。となると set は過去分詞と考えざるを得ないわけです(もちろん本来他動詞

であるはずの set に目的語が付いていないのも大きなヒントでした)。
そうすると garden～southwest まではこんな訳になります。

「ニワムシクイは、人工的な秋の空がその建物のドームに映し出されている時に放たれると、本能的に南西に向かおうとした[する]」

southwest 直後の the direction ～ year までは、southwest を同格的に説明する働きをしています(この部分も文の骨組みにはならない)。

direction と they の間には関係代名詞の which が省略されており(「名詞+S+V」の構造)、they would以下は direction を修飾しています。

the direction
↑ 方向
[they would have taken had they been let loose
S V 取る S V 解き放たれる
into the wild at that time of the year]
野生 一年のその時期に

そしてここ(they would ～ the yearまで)が仮定法の表現になっているのです。
had they been～ は、(仮定法の) if の省略で、if を元に戻せば if they had been ～です。

仮定法の if の省略された条件節の見極め法については LESSON BOOK REVIEW Rule-43 を参照せよ。

had they been let loose into the wild at that time of the year

→ if they had been let loose into the wild at that time of the year

この部分はそうすると「ニワムシクイが一年のその時期に野生に解き放たれたならば進んだ[とった]であろう方向」となります。

【全訳】
「ニワムシクイは、人工的な秋の空がその建物のドームに映し出されている時に放たれると、本能的に南西 ― 彼らが一年のその時期に野生に解き放たれたならば進んだであろう方向 ― に向かおうとするということを、ドイツのあるプラネタリウムにおける驚くべき実験が証明した[示した]」

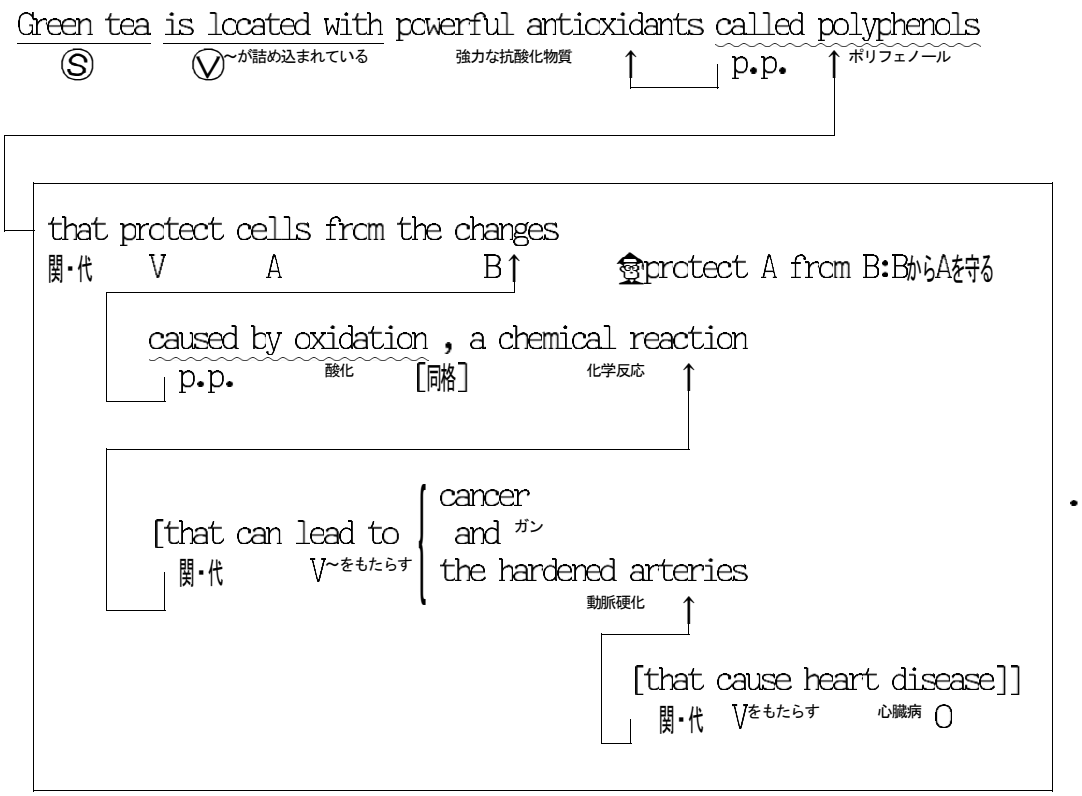
もちろんこれも無生物主語構文なので、「ドイツのあるプラネタリウムにおける驚くべき実験によって～がわかった」と意訳してもかまわない。

14. Green tea is located with powerful antioxidants called polyphenols that protect cells from the changes caused by oxidation , a chemical reaction that can lead to cancer and the hardened arteries that cause heart disease.

《語句》 be located with A: Aが詰め込まれている
antioxidant:抗酸化物質、酸化防止剤
polyphenol:ポリフェノール
protect A from B: BからAを守る
cell:細胞
oxidation:酸化
lead to A: Aをもたらす、Aを
=cause A 引き起こす
hardened arteries:動脈硬化
heart disease:心臓病

【解答＆解説】

本問のポイントは、関係詞節内の関係詞節をきちんと見抜くことができたかどうかでした。構造分析図を示してみましょう。



和訳のポイントとして、cause，lead to，cause と、同じ「～を引き起こす」という意味の動詞が３つ連続するところをどうやってうまくまとめるかが難しかったかもしれません(模範訳を参考にしてください)。ここは lead to が「動詞+to～」型であるところから「～に至る、～につながる」とするとうまい和訳になったでしょう。

LESSON BOOK REVIEW 66ページを参照せよ。

それから can lead to の can は「可能性の can」。「～の可能性がある」「～しうる、～であり得る」と訳さなければなりません。長文(特に評論文)中における can は、この可能性の can が多いのです。覚えておきましょう。それから cxidaticn の後ろのカンマ(,)は同格のカンマです。

【全訳】

「緑茶には、酸化によって引き起こされる(様々な)変化から細胞を守ってくれるポイフェノールと呼ばれる抗酸化物質が詰め込まれている。そしてこの酸化というのは、ガン、心臓病を引き起こす動脈硬化につながる可能性のある化学反応である」

15. ① If a man's thinking leads him to call in question ideas and customs which regulate the behavior of those about him, to reject beliefs which they hold, to see better ways of life than those they follow, it is almost impossible for him, if he is convinced of the truth of his own reasoning, not to betray by silence, chance words, or general attitude that he is different from them and does not share their opinions. ② Some have preferred, like Socrates, to face death rather than conceal their thoughts. ③ Thus freedom of thought, in any valuable sense, includes freedom of speech.

《語句》 call A in question: Aに疑問を抱く
regulate A: Aを規定する
reject A: Aを拒絶[否]する
ways of life: 生活様式
ライフスタイル
be convinced of A: Aに確信を持っている
reasoning: 論理
chance words: ふとした言葉
attitude: 態度
A rather than B: BというよりむしろA
face A: Aに直面する
conceal A: Aを隠す
in (a) ～ sense: ～な意味で

【解答＆解説】

①

①はなんと５行もありますが、一文で構成されています。ただ骨組み自体は

If S+V～，S+V…

という構造です。
あまりに長いので、まずは If S+V～，部分を考察してみましょう。以下がその構造分析図になります。

If a man's thinking leads him
S V O

to call in question { ideas / and / customs }
～に疑問を抱く　　習慣

[which regulate the behavior of those about him]
V～を規定する　行動 O　～の周りの

to reject beliefs [which they hold]
～を拒絶する　〈O〉　S　V持っている

to see better ways of life than those [they follow]
〈O〉　S　V

lead は「lead O to do[原形]～：Oを～する気にさせる」という語法ですが、LESSON BOOK REVIEW Rule-23 3. を用いて「Sはoが～する方向に仕向ける」と訳してもいいでしょう。call については、本来 call A in question となるところを(Aが長いので) call in question A という語順になっています。

LESSON BOOK REVIEW Rule-47 を参照せよ。

それから節中の２つの those ですが、those about him の those は the people、those they follow の those は the ways of life を指しています。

LESSON BOOK REVIEW Rule-55 1. を参照せよ。

それから節中の hold ですが、hold の『核』のイメージは「持つ[つかむ]＋保持する」です。つまり多くの hold は have[grasp] もしくは keep で代用できてしまいます。本問の hold も「持っている[抱いている]」と訳せばいいでしょう。

ただし hold の方は「がんばって keep[have] している」という感じ。keep には「がんばって」というイメージはない。したがって、hold の方が「短時間(一時的に)持っている[おさえている・保っている]」という意味合いになる。

ではこの部分をまず直訳してみましょう。

「もし人間の思考が、人間が自分の周囲の人びとの行動を規定する思想や慣習に対して疑問を抱き、彼らが抱いている信念を拒否し、また彼らが営んでいる生活様式よりもよい生活様式を目にする方向に仕向ける場合には」

この節は無生物主語構文なので、PartⅣ 1. にある無生物主語構文のうまい訳し方のルールを使って以下のようにまとめると、よりこなれた訳になります。

「もし考えることによって、人は自分の周囲の人びとの行動を規定する思想や慣習に対して疑問を抱き、彼らが抱いている信念を拒否し、また彼らが営んでいる生活様式よりもよい生活様式を目にするようになると」

次に主節部分。まずは構造分析図を示してみましょう。ただ少々複雑なので、挿入されている語句である

①if he is convinced of the truth of his own reasoning

②by silence, chance words, or general attitude

を省いて示してみます。文頭の it は仮主語。not to betray 以下が真主語になっています。that he is～opinions は betray の目的語になっています。

it is almost impossible for him not to betray

that he	is different from them	
(接)	V C and	
	does not share their opinions	
	V O	

〈O〉

betray は that節を目的語に取っているので、ここは「言う」と訳せばいいでしょう。
LESSON BOOK REVIEW Rule-21 2.(1) を参照せよ。
them は those about him つまり「(自分の)周囲の人」を指しています。
そうするとこの部分は「自分が周囲の人と異なっていて、意見も同じでない[共有していない]ということを(人に)言わないでいることはまず不可能なのである」となります。
挿入句[節]ですが、

(1)if he is convinced of the truth of his own reasoning は is impossible を修飾している。

(2)by silence, chance words, or general attitude は betray を修飾している。

the truth of his own reasoning の of は「主格の of」とみて

⇒ his own reasoning is true

と読み換え、「自分の論理が正しい」と訳すといいでしょう。
by は「手段」。「～によって」と訳すといいでしょう。
そうすると(1)は「自分の論理が正しいということを確信しているならば」、(2)は「沈黙やふとした言葉や態度全体によって」となります。
では①全体をまとめてみましょう。

「もし考えることによって、人は自分の周囲の人びとの行動を規定する思想や慣習に対して疑問を抱き、彼らが抱いている信念を拒否し、また彼らが営んでいる生活様式よりもよい生活様式を目にするようになるのであれば、沈黙やふとした言葉や態度全体によって、自分が周囲の人とは異なっていて、意見も同じでないということを人に漏らさないことは、自分の論理が正しいということを確信しているかぎり、まず不可能である」

②
文頭の Some は Some people と見るといいでしょう。
LESSON BOOK REVIEW Rule-55 3. を参照せよ。

like Socrates は(カンマにはさまれた)挿入句。「ソクラテスのように」となります。
ここを(　　)でくくると「prefer to do[原形]～:～するのを好む」が見えてきます。
そうすると②全体は、「中にはソクラテスのように、自分の考えを隠すくらいなら死んだ方がましだと考える人びともいた」となります。face death は、直訳は「死に(臆せず)立ち向かう、直視する」ですが、「死ぬ」と訳せばいいでしょう

③
文頭の Thus は「こうして」という意味の副詞(文の主要素にはならない)。それから②同様(カンマにはさまれた) in any valuable sense を(　　)でくくると、freedom of thought がＳ(主語)、includes がＶ(動詞)と見えてきます(freedom of speech がＯ(目的語)の第三文型(ＳＶＯ))。
そうすると③は以下のような和訳になるでしょう。

「こうして思考の自由には、いかなる価値ある意味においても、言論の自由が含まれる」
肯定文における any は「いかなる～(にせよ)」「どんな～(であれ)」と訳す。

【全訳】
「もし考えることによって、人は自分の周囲の人びとの行動を規定する思想や慣習に対して疑問を抱き、彼らが抱いている信念を拒否し、また彼らが営んでいる生活様式よりもよい生活様式を目にするようになるのであれば、沈黙やふとした言葉や態度全体によって、自分が周囲の人とは異なっていて、意見も同じでないということを人に漏らさないことは、自分の論理が正しいということを確信しているかぎり、まず不可能である。中には、ソクラテスのように自分の考えを隠すくらいなら死んだ方がましだと考える人びともいたのだ。こうして思考の自由には、いかなる価値ある意味においても、言論の自由が含まれる」

16. ① Some people are so changed by their life's experience that in old age they behave in completely unexpected ways. ② Many of us know elderly men and women who no longer act as we have come to expect them to act. ③ I am not talking here about victims of senile dementia. ④ In the examples I am thinking of the person continues to behave in what most people would agree is a normal manner, but one so remote from his old self that he appears, to those who know him, to be someone else entirely.

《語句》 behave:振る舞う、行動する
completely:全く、完全に
unexpected:予想外の
no longer:もはや～ない
come to do[原形]～:～するようになる
victim:犠牲者、被害者
senile dementia:老人性痴呆症[認知症]
continue to do[原形]～:～し続ける
manner:やり方、方法 =way
remote:かけ離れた
appear (to be) C(形・名):Cのように見える
entirely:全く、完全に

【解答＆解説】

①
骨組みは so ～ that S+V… で「とても～なので…する」です。in ～ ways で「～なやり方[方法]で」。これがわかればあとは簡単だったはず。そうすると①全体は「人生経験によって大きく(性格が)変わってしまい、年をとって全く予想もしないような(方法で)行動をしたりするような人達もいる」となります。

②
ここは語句さえわかれば問題なかったはず。「私達がこれまでそうするだろうと予測したようにはもはや行動しないお年寄りを、私達の多くは知っているものだ」となります。

ここでの as が「～なように」と様態で訳す根拠は、as 前後に同じ語句の反復(act)があるから。LESSON BOOK REVIEW P85(注2) を参照せよ。

③
ここも語句さえわかれば問題なかったはず。「私は老人性痴呆症[認知症]の患者についてここで語っているのではない」となります。

④

④がこの問題の最大の難所でした。
まず以下の英文ですが、

In the examples I am thinking of the person continues to behave in…

このような構造分析をした人はいませんでしたか？

In the examples // I am thinking of the person continues to behave in…
(前)　(名)　Ⓢ　Ⓥ　S　V

これは完全な誤りです。その根拠は of が前置詞だということ。前置詞の後ろには「名詞(の仲間)」しかこれません。S+V といった構造が続くことはあり得ないのです。
ここは以下のような分析をしなければいけません。

In the examples [I am thinking of] //
(前)　(名)　S　V

the person continues to behave in…
Ⓢ　Ⓥ

「名詞 S+V」という構造に出会ったら、(名詞の直後に関係詞が省略されているとみなして)S+Vを前の名詞にかけて訳すんでした。
LESSON BOOK REVIEW Rule-52 を参照せよ。

そうするとここまでは「私が考えている事例では、その人は…なやり方で行動し続ける」となります。in は「…でもって」と訳し、手段を表します。
さて次に

in what most people would agree is a normal manner, but one so remote from his old self that he appears, to those who know him, to be someone else entirely.

の部分。分析を試みてみましょう。
その際、等位接続詞の but にも着目してください。LESSON BOOK REVIEW Rule-11 にもこうありました。

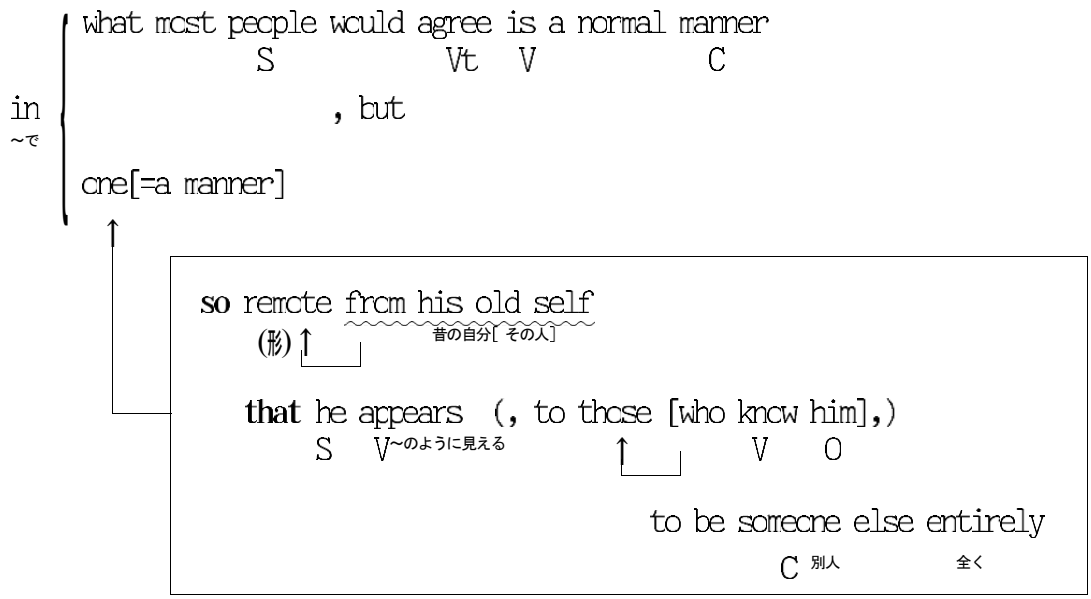
読解においては、文中に等位接続詞 (and, but, or など)を発見したら、それらが何と何(誰と誰)を結んでいるのか、等位接続詞の左右の「同構造」をヒントにし

て、確実に見極めよ。その結ばれたもの同士には以下のような２つの共通点があるはず

①構造的に等しい　☞例えば一方が「名詞」なら、もう一方も「名詞」。一方が「S+V」ならば、もう一方も「S+V」の

②文中での働き[機能]が等しい　☞例えば一方が文の主語になっているなら、もう一方も文の主語のはず。

ではこれを手がかりに構造分析図を示してみましょう。



実は but は what節 という名詞節と one という代名詞を結んでいたのです。そして両者共に in という前置詞の目的語になっていました。こうみてみると確かに

①「構造」…同じ名詞の仲間同士
②「機能」…共に前置詞の目的語

という２つの点で両者は共通ですね。

厳密に言うと、what節 と one では「節」と「語」で、形は異なる。それでも but によって結ばれうる理由については、LESSON BOOK REVIEW Rule-13 を参照せよ。

さて構造が分析できたところで、では細かく見ていきましょう。まず

what most people would agree is a normal manner

は、関係代名詞の what が導く節内が「S+Vt+V～」という構造になっています。これは連鎖関係詞節です。

LESSON BOOK REVIEW Rule-69 を参照せよ。

このような連鎖関係詞節のうまい訳出法は、「S+Vt」の部分をいったん(　　)でくってしまい、それを(関係詞)節内の和訳の最後にもってくることでしたね。
ただもう一点押さえたいのは、what を the manner which と読み換えると良いということ。

⇒ the manner [which (most people would agree) is a normal manner]
　　↑　　　　　　ほとんどの人が認める　　V　普通の　C やり方

そうするとここは「普通(のやり方)だとほとんどの人が認めるようなやり方」と訳せばいいでしょう。このように関係代名詞の what は「こと・もの」で訳して問題なければそれでもいいのですが、それではうまい訳にならない場合、上記のように文脈に則して訳を変える必要があります。
関係代名詞の what というのは

(「それ」「もの・こと」といった)漠然とした先行詞 + which

のことだと習ったはずです。「それ」「こと・もの」は、その文脈・状況に則して何にでもなれる[何でも示しうる]わけです。
だから場合によっては、その「それ」「こと・もの」を具体的に(文脈に則して)表さないと良い訳が作れないことがあるのだ。

上記の英文の場合、

most people would agree	that is a normal manner
S　　V	Sそれ　V　　C
	O

という英文の that が関係代名詞の what となって節頭に移動したわけで、元々(SVCは「S＝C」の関係になるので)「that = manner」の関係だったのです。

「関係代名詞の what は、文脈に応じて何にでもなれる[何でも示しうる]」

このことを覚えておくといいでしょう。
次に

one so remote from his old self that he appears, to those who know him, to be someone else entirely.

の部分ですが、one は「a+既出の単数名詞」で言い換えられる代名詞の one です。

ここでは a manner を指しています。そして構造分析図で示したように、直後の so remote ～ entirely まで全体が、この one を修飾する構造になっていました。
remote は形容詞。後ろから代名詞を修飾して問題ないわけです。
　LESSON BOOK REVIEW Rule-１の3. を参照せよ。

そして so 以下は so ～ that S+V… の構造。「とても～なので…」でまとめます。
that 節内には appear to be C(形･名) が使われていました。to those who know him の部分を(　　)でくくるとそれがわかりやすかったでしょう。
　LESSON BOOK REVIEW Rule-５の4. を参照せよ。

those who V～ は「～する人々」と訳せばいいでしょう。
　LESSON BOOK REVIEW Rule-55の１. を参照せよ。

そうするとこの部分は「昔のその人からはあまりにかけ離れてしまっているので、その人を知っている人には全くの別人であるかのように見えるやり方」となります。
では in ～ entirely 全体をまとめてみましょう。こうなります。

「普通(のやり方)だとほとんどの人が認めるようなやり方ではあるが、昔のその人からはあまりにかけ離れてしまっているので、その人を知っている人には全くの別人であるかのように見えるやり方で(もって)」

【全訳】
「人生経験によって大きく(性格が)変わってしまい、年をとって全く予想もしないような(方法で)行動をしたりするような人達もいる。私達がこれまでそうするだろうと予測したようにはもはや行動しないお年寄りを、私達の多くは知っているものだ。私は老人性痴呆症[認知症]の患者についてここで語っているのではない。私が考えている事例では、その人は、普通(のやり方)だとほとんどの人が認めるようなやり方ではあるが、昔のその人からはあまりにかけ離れてしまっているので、その人を知っている人には全くの別人であるかのように見えるやり方で(もって)行動し続けるのだ」